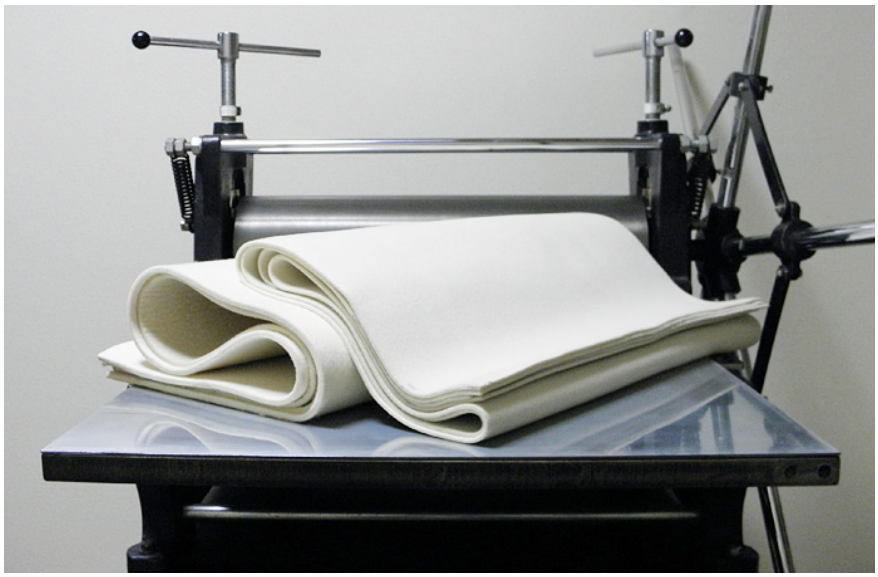
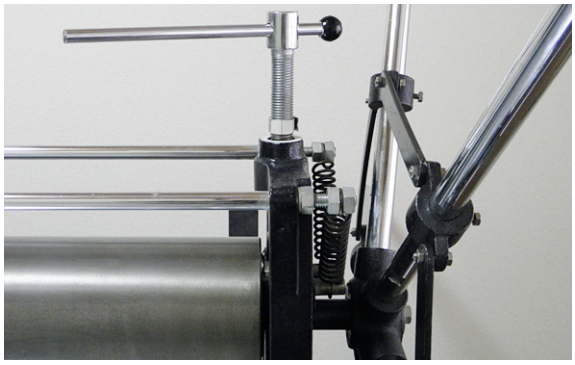
11　プレス圧の調整及びラシャについて



写真：
プレス機
フェルト（左側）
ラシャ（右側）

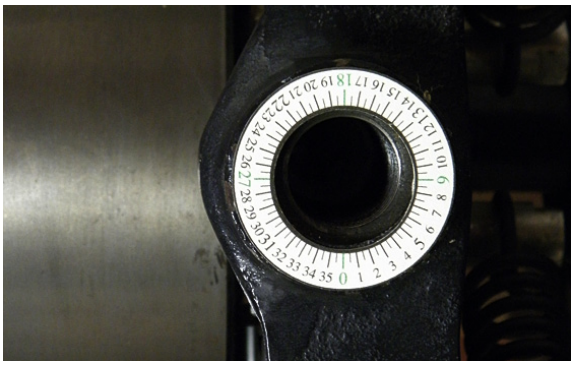
プレス機の圧調整には、幾つかの方法があるだろうが、ここでは私の調整の仕方を述べる。ラシャやフェルトは、作家によって使用する枚数や厚みが違うだろう。また、それらを組み合わせて使うこともあるだろう。ここでは３ミリ厚のラシャを２枚使用する。フェルトは、普通の印刷には用いないが、深い腐蝕によるエンボスなどの印刷には必要である。尚、プレス機のベッドプレートには、同じ大きさの２ミリ厚の亜鉛板を重ねている。



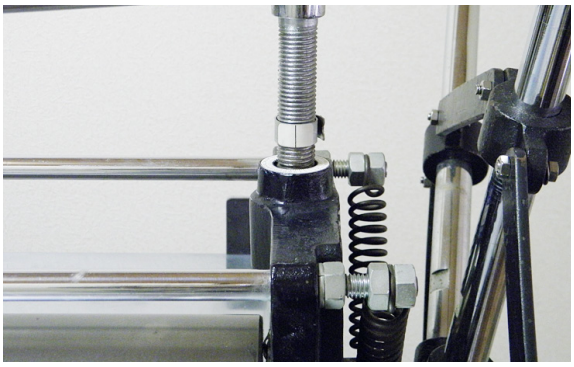
プレス圧の調整

1. 写真のように、圧力ネジ棒とそのネジ受け部に工夫をする。圧力ネジ棒には、ネジの太さに合ったホースバンドを締めている。また、ネジ受け部の台座には、座金のようなものを厚紙で作って両面テープで貼っている。それには時計とは反対方向に目盛りを5度ずつ印している。

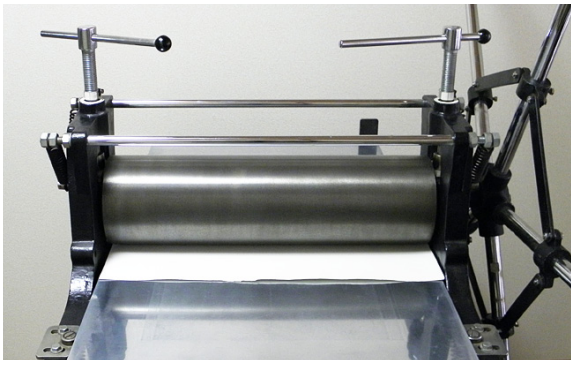
2. ホースバンドに、垂直線を引いた粘着シートを貼る。このホースバンドの線と、ネジ受け部の台座の目盛り盤で圧を加減する目安にする。



3. 圧力ネジ棒を抜き取り、厚紙で作った目盛盤を両面テープで貼りつける。尚、貼りつける時は、2 枚の目盛盤の「0」が台座の同じ向きになるように貼る。それで、写真の目盛盤では「0」が下向きなので、反対側の目盛盤も同じように「0」が下になる。

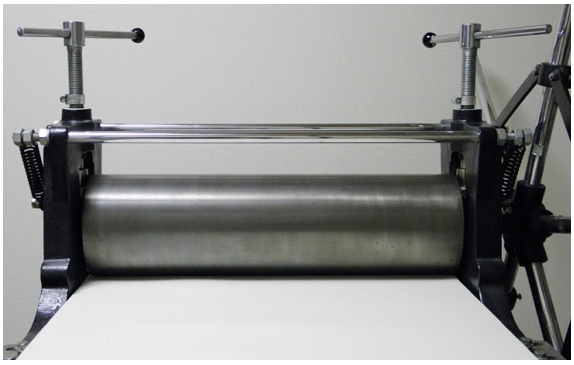


4. ホースバンドを圧力ネジ棒の上部に仮止めする。そして、圧力ネジ棒を差し込みローラーを下げ、ベッドプレートと平行になるように少し隙間を作る。

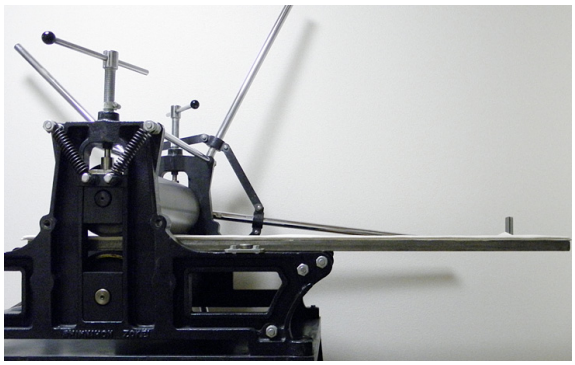


5. ベッドプレートの中央が、ローラーの下に来るように手で押して移動する。厚紙を 200 ミリ程の幅でローラー幅の長さに切ったものを準備し、それをベッドプレートとローラーの間に置く。あるいは、この厚紙の代わりに実際に使用するラシャの切れ端を置く。

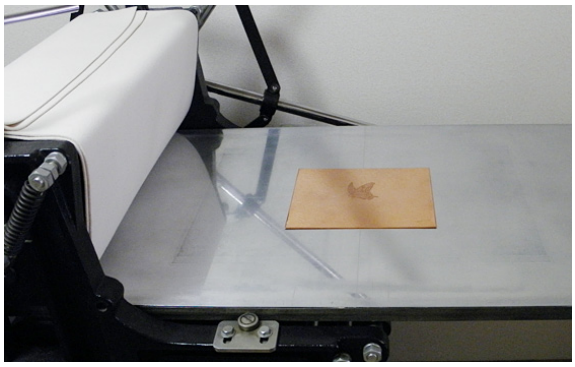
6. ベッドプレートとローラーの間に厚紙 (あるいはラシャの切れ端）を挟んで、両方の圧力ネジを十分締めつける。ホースバンドの止めネジを弛め、ホースバンドに印した線と目盛り盤の「0」を合わせて締め直す。



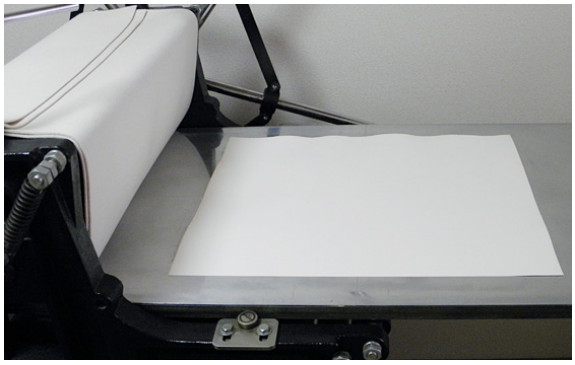
7. 両方の圧力ネジを弛め、厚紙（あるいはラシャの切れ端）を取り除いて印刷に使用するラシャを通す。



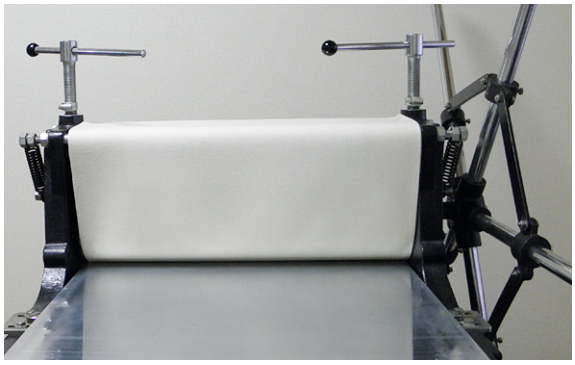
8. ラシャを通したら、ベッドプレートが軽く動く程度に同じ圧を 2 本の圧力ネジでかけ、片側によせる。



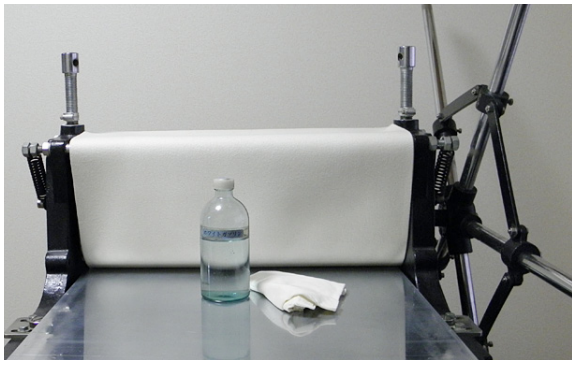
9. ラシャをめくり上げ、インキを詰めていない版をベッドプレートの中央に置く。尚、ドライポイントなどの微妙な仕事の版は、それと同じ大きさの版を別に準備して圧を決めるテスト版にする。



10. 版よりも大きな吸取紙、または湿らせていない印刷用紙など適当な紙を重ねる。ラシャを広げて、ベッドプレートを動かして圧の加減を見る。圧の加減は目盛り盤を利用する。何度かローラーに通して適当な圧が決まれば、版を取り出して印刷にかかる。



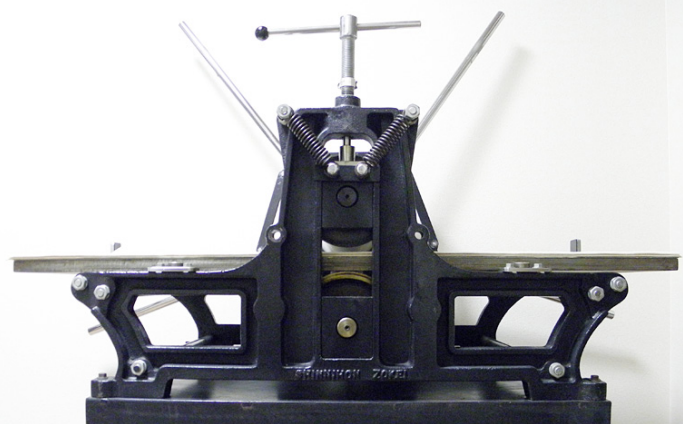
11. 微妙な圧の調整は、2、3 枚印刷をして決める。そして印刷の圧が決まれば、その圧を控えておく。



12. 印刷は、印刷の都度ベッドプレートの汚れをホワイトガソリンで拭き取りながら行う。それから、印刷中は圧調整レバーを外しておく。

印刷の後始末

その日の印刷を終えたら、ベッドプレートの汚れをホワイトガソリンでしっかり取り除く。圧を戻すときは、ラシャを下ろして広げ、ベッドプレートの中央に移動させてから２本の圧力ネジを弛める。



またラシャは、１枚ずつ掛けるか吊るすかして乾かす。写真は圧を弛め、ローラーを上げた状態。

ラシャについて

印刷でどうしても必要なものがラシャである。ラシャは織りフェルトと言われるもので、俗に言うフェルト（圧縮フェルト）とは異なる。印刷ではラシャを２～３枚重ねて使用する。重ね方にも薄手の上に厚手を重ねたり、またラシャの上にフェルトを重ねたりと人によっては用い方が異なる。深い腐蝕を施した版のエンボス印刷にはフェルトを使うとしても、通常の印刷には織りフェルトのラシャを使用する。

小さな作品などを続けて数多く印刷すると、ラシャが湿りを帯びて作品に皺がいく。そのような時にはラシャを交換する。そのためには常に予備のラシャを用意しておく必要がある。また、その湿りを防ぐ方法として、印刷用紙よりも一回り大きめの吸取紙やザラ紙などを当てがって（重ねて）印刷することもある。当てがう紙は印刷の都度交換し、必ず乾いたものを使用する。

ラシャは長く使用すると、汚れたり、硬くなって弾力を失う。その時はぬるま湯に浸け、ウール用の中性洗剤で押し洗いする。洗った後はよく濯ぎ、軽く洗濯機で脱水する。そして、風通しのよい日陰でネットなどを用いて平らな状態で乾かす。このようにラシャは洗うことができるが、フェルトは形が崩れるので洗えない。

銅版磨き用のダバーを作る

ラシャ及びフェルトが古くなったもの、またはそれらの切れ端でダバーを作るとよい。それらがない場合は、ウエスを巻き重ねても良いだろう。ラシャは適当な大きさに切り取って固く巻き、タコ糸で等間隔に縛る。ダバーは使用して時間が経過するとどうしても研磨剤が固まるので、銅版を傷つけないために先を３～５ミリほど切り落とす必要がある。写真のダバーは、105 × 370 ミリの大きさのラシャを巻いたもので、直径は 35 ミリ程になる。